

モダニスト女性作家の家庭生活のディレンマ  
——ヴァージニア・ウルフと家事使用人の葛藤——

手塚裕子\*

A Modernist Woman Writer's Dilemma  
Virginia Woolf's Struggle with her Domestic Servants

Yuko TEZUKA

**Abstract**

Nelly Boxall had served Virginia Woolf for eighteen years as a live-in servant. Nelly was a cook. In the nineteenth century live-in-service was at a peak. Servants were everywhere in British society. Yet change did come. In the early twentieth century, the disappearance of the live-in servant from most British homes is a suggestive fact. Virginia Woolf famously dated the beginning of the change; “in or about December, 1910” (“Mr. Bennet and Mrs. Brown”).

Virginia Woolf was born in the late Victorian era. She was brought up surrounded by live-in servants. However, when she married, the relationship between mistress and servants became difficult. Virginia's diaries attest to how she was afflicted with “questions of Nelly.” Through struggling with her cook, Virginia acquired new perspective toward freedom, and a new life style without servants. In this paper, by examining the problematic relationship between Virginia Woolf and Nelly Boxall, I would like to discuss the changing process toward modern life without servants.

Key Words: Virginia Woolf, modernism, servants

2014年8月、英国では第一次世界大戦開戦から100年を迎えた。1914年8月に始まった戦いは、19世紀を通じて世界に君臨した大英帝国の瓦解の始まりだった。英国は戦いに勝利したものの、戦争は階級制を基盤としたイギリス社会の構造を根底から覆した。

---

\*教授 英文学

第一次世界大戦には、パブリックスクール出身の若者たちが志願し、多大な犠牲を出し、支配階級は大きな打撃を受けた。一方、労働者たちは戦地で活躍し、自分たちの力に自信を得、女性たちは戦時中の労働力不足解消のため、社会に進出し、女性たちも自信をつけていた。そして戦後、労働運動と婦人参政権運動が盛り上がり、1924年、第一次労働党内閣が成立し、1928年、婦人参政権が承認される。1939年に始まり1945年に終わった第二次世界大戦において、またもイギリスは勝利をおさめるが、階級社会崩壊の流れは止まることはなく、ますます勢いを増していった。戦後、英国のほぼすべての植民地は独立し、労働党内閣の下で導入された重い財産税、相続税によって、貴族階級は没落し、階級制度は崩壊し、民主化が促進され、21世紀の今日に至る。

1914年から始まり1945年に終わる二つの世界大戦は、イギリスの歴史にとって、革命に匹敵するほどの変化の時代であった。その中でも最も顕著な変化の一つは、住み込みの召使の消滅ではないだろうか。19世紀イギリスの中流以上の家庭には、当たり前のように存在していた住み込みの召使たちは、二つの大戦を経て、社会から姿を消してしまった。パメラ・ホーンとシャーン・エヴァンスは、それぞれの著書の中で、大きな分岐点は、第一次世界大戦であったと次のように指摘している。

第一次世界大戦は家事奉公の歴史上、一つの分岐点である。女中という職につくよりほかには選択の余地はないと感じてきた娘たちが、今や工場労働者、バスの車掌、食堂の手伝い、婦人農耕部隊の隊員、看護婦、店員として活躍し、軍隊に召集された男たちにかわってしばしばその仕事に就いたのである。戦時中、女性家事使用人の数は四分の一だけ減少した。一方、女性の軍需工場労働者は二十一万二千人から九十万人を超えたところまで増加した。(パメラ・ホーン著『ヴィクトリアン・サーヴァントー階下の世界』 p.274)

1914年から18年の戦争によって、以前なら誰もが何の疑いもなく頼りきっていた家事使用人の世界は、非常に大きな一部の家のをぞいて、ついに終わりを迎えることになる。大邸宅はほとんどの部屋を閉鎖せざるを得なくなり、人員を削減してどうにかやりくりすることになった。そして、ようやく休戦宣言が出て、若い男たちが「英雄たちにふさわしき故郷の地」に戻って来たとき、彼らの多くは服従と階級区分がささえてきた古い秩序に立ち返ることを嫌がった。(中略) 1837年のヴィクトリア女王の即位から、第一次世界大戦のショッキングな大量殺戮までのあいだに、ベッドと食事とわずかな給料を受け取る見返りに、地主階級の面倒を見る、というシステムは、ゆっくりと進む革命の影響をこうむっ

ていた。

(シャーン・エヴァンス著『メイドと執事の文化誌—英国使用人たちの日常』 pp.278-9)

21世紀のイギリス及び日本では、人口の大部分が大戦後生まれとなった。住み込みの使用人がいる暮らしを知らない世代にとって、使用人のいる暮らしは、未知の領域として、興味深い研究対象である。前出のホーンやエヴァンスをはじめとして、歴史的資料を駆使して使用人の待遇や生活状況について、現在、様々な研究がおこなわれている。しかしながらそれらの研究の多くは、使用人の立場や心理が中心になっていて、雇い主の側の意識の変化については、まだ、十分に踏み込んでいないように思われる。そこで本稿では、進歩的な思想をもった上層中流階級出身の女性作家、Virginia Woolf (1882~1941) の目を通して、雇い主の側から見た、使用人を雇うことの問題点について、考察してみたいと思う。

Virginia Woolf は、ヴィクトリア朝末期、ロンドンの上層中流家庭に生まれる。高級住宅街の邸宅では、7人の召使が11人の家族に仕えていた。典型的な上流夫人である母は、育児や家事労働を使用人に任せていたので、Virginia は、乳母の手で育てられ、ヴィクトリア朝の女性の理想であった「家庭の天使」となるように教育される。しかし、時代の変化に反応する鋭敏な知性と感受性をもつ彼女は、ヴィクトリア朝の価値観に疑問を感じるようになる。自伝的エッセイ『過去のスケッチ』の中で、Virginia は自分と姉の Vanessa は、生来の改革者であったと回想している。

The cruel thing was that while we could see the future, we were completely in the power of the past. That bred a violent struggle. By nature, both Vanessa and I were explorers, revolutionists, reformers. (p.147)

生来の改革者である Virginia は、社交界に出て結婚相手を探すことを拒み、小説家として自立する道を模索する。「女性と職業」のエッセイの中では、女性が作家になるためには、母の世代の古い理想的な女性像である「家庭の天使」の亡霊を殺さなくてはならなかったと告白している。母の価値観に反抗する Virginia は、父と母の夫婦関係についても疑問を投げかける。『過去のスケッチ』の中で、高名な学者である父は、無学な母を馬鹿にしていたが、実際には、父は女に依存し女に慰めてもらわなければ何もできない弱い存在であることを鋭く指摘し、ヴィクトリア朝の家父長制に安住し威張っている男たちの弱さを暴露した。Virginia が結

婚相手に選んだ Leonard は、ヴィクトリア朝の家父長ではなく、妻の仕事をサポートするような新しいタイプの夫だった。ヴィクトリア朝が終わって 20 世紀が始まり、少しずつだが確実に、親子関係、夫婦関係が変化していることを敏感に感じとった Virginia は、エッセイ “Mr. Bennett and Mrs. Brown” の中で、「1910 年 12 月頃、人間の性格が変わった」と述べた。

All human relations have shifted — those between masters and servants, husbands and wives, parents and children. And when human relations change there is at the same time a change in religion, conduct, politics, and literature. Let us agree to place one of these changes about the year 1910.

Virginia は変わりゆく人間関係を、主人と召使、夫と妻、親と子 3 つに分類している。夫と妻、親と子の関係において Virginia は、支配される立場に立っていたので、旧体制を攻撃する過激な革命家だったが、主人と召使の関係では、女主人である彼女は、支配者として、旧体制側に立たされることになる。モダニストでありフェミニストである進歩的な知識人として Virginia は、男女差別に抗議し、女性の自立、教育の機会均等、社会進出を主張していたが、家庭の中では、下層階級の女性を召使として支配し、差別する側に立たされたのである。それは、自由を希求するフェミニストとしての Virginia の矛盾であり、ディレンマであった。

今まで、Virginia Woolf のフェミニズムについて、多くの論文が書かれてきたが、彼女と召使の関係を論じた研究は、2000 年代に入ってから、Mary Wilson や Alison Light が興味深い研究書を発表しているが、まだ始まったばかりである。ヴィクトリア朝家父長制を攻撃する時の Woolf の歯切れの良さに比べて、召使との関係を論じる時、彼女の意識の底に潜む旧式な階級意識が浮かびあがり、何とも歯切れが悪い。おそらく生まれた時から住み込みの召使に囲まれて育った Virginia は、召使のいない時代に育った現代人のように、完全に階級意識から解放されることはなかつただろう。心の中に深く根を張る階級意識を払拭することの難しさを、Mary Wilson は、次のように述べている。

As modernist writers grasp at new fictional forms to better capture the flux and upheaval of their experiences of modern life, they also seek new domestic arrangements and critique those of past generations. But relationship between modernism and domesticity is more complex than a simple rejection of the structures of the past.

(*The Labors of Modernism*, 2013, p.5)

Virginia Woolf は、女主人として召使を雇い支配しながら、実際の生活では召使に依存している自分自身を嫌悪し、罪の意識を感じる一方、従順でない召使に苛立つ。全5巻の日記 (*The Diaries of Virginia Woolf, from 1915 to 1941*) には、住み込みのコック、Nelly との葛藤が克明に記されている。この日記には、自由と平等の理念をもつ現代的な知識人である女性が、召使との関係で、自分自身の信条と現実生活のギャップに苦悩する様子が赤裸々に綴られている。Alison Light は、見たくない自分の欠点である階級意識に対しても、正面から向き合おうとする Virginia の強烈な自己認識 (self-awareness) を高く評価して、次のように述べている。

The offensive passages in Virginia's writing about the poor or the suburban, about 'the Jew' or 'negroes', can be matched by others equally vile in the work of many of her contemporaries. But she was highly unusual in examining many of her reactions and feelings, probing her sore spots, especially in her diaries. If Woolf was right in thinking that from 'the spectacle of oneself, most of us shy away,' combination of narrowness (in social experience, for example) and extreme self-awareness is one reason why her diaries are so compelling. (*Mrs. Woolf & the Servants*, 2007, p.xviii)

Nelly は 18 年間コックとして、Virginia に仕えた。伝記作家の Hermione Lee は、「この 18 年間の関係は、Virginia Woolf の人生の中で最も強烈で、或る意味、親密なものの一つであった」と述べている。(*Virginia Woolf*, p.350) Nelly と苦闘した Virginia の 18 年間の日記は、召使のいる時代から召使のいない時代へと移り変わる過渡期の貴重な証言である。では次に、Virginia Woolf の日記と手紙に記された Nelly と Virginia の葛藤について詳細に検証しよう。

Nelly Boxall は、1890 年、サセックス州の貧しい家に生まれ、生後 5 か月で父を亡くし、義務教育は受けたが、12 才で母を亡くして孤児となり、14 才で住み込みの奉公に出る。努力して料理の技能を身に付け、美術評論家 Roger Fry のコックとなる。Roger のモダンな邸宅、Durbins には、電気もセントラルヒーティングも水洗トイレもあった。その家で、Nelly は小間使いの Lottie Hope (1892~1973) と出会い、生涯の友となる。第一次世界大戦が始まると、Roger は、Durbins を閉鎖し、二人の召使、Nelly と Lottie を Virginia Woolf に紹介する。

1916 年 2 月、Nelly と Lottie は、リッチモンドにある Virginia と Leonard の家、Hogarth House で働き始める。Virginia は 34 才、前年の 1915 年に処女作、*The Voyage Out* を出版して作家としてデビューしたばかりで、体調を崩して病気がちだった。Nelly は 25 才、Lottie は

24才だった。2人は、年38ポンドで雇われた。Nellyは、Virginiaとの最初の出会いの印象を次のように回想している。“She was so sweet that I knew I should like working for her.” (Light, p.221) Virginiaは食欲がなかったが、Nellyのつくったクリーム・ブリュレやホームメイド・アイスクリームを好んで食べたようである。こうして、Virginiaと新しい召使の関係は、ロンドンの家で和やかにスタートするが、翌年、Virginiaの体調が回復して、サセックスの別荘に滞在するようになると、労働条件をめぐる問題が起こる。

Virginiaは、結婚する前から、田舎での生活を楽しむために、別荘を借りていが、Asheham Houseには、電気も水道もなかった。召使は井戸から水を汲み、石炭が足りない時には、薪になる小枝を集めなければならなかった。近隣に商店もなく、NellyとLottieは4マイル離れたルイスまで自転車で往復しなければならなかった。その労働量は、耐え難いものだったので、Nellyは、1917年春に、最初の辞表をVirginiaに突き付ける。驚いたVirginiaは、次のような手紙を姉、Vanessa Bellに書き送る。

Nelly gave notice our last day at Asheham — as I expected. Neither she nor Lottie feel can face 6 weeks there in the summer; so I'm speculating on a complete change — one servant, and meals from the communal kitchen, which is going to be started, near us I hope. (Virginia's Letter dated on 26<sup>th</sup> April, 1917)

コックが辞めたいと言うなら、いっそコックを解雇して、共同の厨房から食事を取り寄せてみたらどうかというVirginiaのアイデアは、奇抜なようだが、現代の宅配弁当に通じるものである。Virginiaの発想は、残念ながら実現しなかったが、驚くほど現代的である。

結局、室内便器の汚物を捨てる下働きを、新しく雇うという条件で、NellyとLottieは我慢することになった。こうしてNellyの最初の辞表は撤回されたが、この後も度々、Nellyは労働条件の改善を求めて、辞表を提出して、Virginiaを悩ませる。Nellyは、労働者の権利にめざめ、自己主張を始めた新しい時代のコックである。Virginiaが幼児期を過ごしたヴィクトリア朝時代(1837~1901)のコックは、学校教育を受けていなかったため字も読めず、労働者の権利も知らず、一日中地下の台所で仕事に励み、めったに階上に姿を現すこともなかった。しかしVirginiaが成人して結婚し、一家の女主人となったジョージ王朝時代(1910~1936)のコックは、Nellyがそうであるように、しばしば階上の客間に姿を現し、新聞を借りたり、帽子をかぶっておしゃれをして外出を楽しむようになった。イギリスでは、1870年から義務教育が始まったので、ジョージ王朝時代のコックは新聞も読めるし、労働者の待遇も改善され、自由

時間に外出できるようになったのである。Woolfは“Mr.Bennett & Mrs.Brown”の中で、ヴィクトリア朝のコックが「深海に潜む巨大な鯨」であるなら、ジョージ王朝時代のコックは、「日光と新鮮な空気の生き物」であると、次のようにユーモラスに両者を比較している。

The Victorian cook lived like a leviathan in the lower depths, formidable, silent, obscure, inscrutable; the Georgian cook is a creature of sunshine and fresh air; in and out of the drawing-room, now to borrow the Daily Herald, now to ask advice about a hat. (p.92)

Nellyが最初の辞表を出した1917年は、第一次世界大戦中だった。女性労働者の多くが工場や大型商店で働くようになり、家事使用人が不足するようになっていた。そのため家事使用人の賃金も高騰していた。VirginiaとVanessaも、使用人のコストが高くなったため、小間使いを解雇して、コックだけを残すことを検討する。小間使いがいなくても、どうにか生活はできるが、料理のできない姉妹には、コックがいなければ、食事そのものができない。VirginiaとVanessaの姉妹が育ったヴィクトリア朝の上流階級の子女の教育には、料理は含まれていなかった。料理はコックの仕事だった。だが、生きていく上で一番重要な食事を、使用人に依存していたことは、階級制度がゆらいだ時、支配階級の最大の弱点となった。だから、VirginiaはNellyに悩まされても、コックを解雇することはできなかった。Nellyは労働者の権利として休日を要求したので、Virginiaはコックのいない日を生き延びるために、必要にかられて、Nellyから料理を習い、“scratch meals”（簡単な食事）を作るようになった。コックが休暇をとって女主人が料理をするなど、Virginiaの母親の時代には考えられないことだった。

1917年になると、ドイツ軍の空襲が激しくなり、主人も召使も地下の台所に避難して、同じ部屋で長い時間を過ごすようになる。1917年12月6日、朝5時、Leonardに起こされたVirginiaは、慌てて地下の台所に避難し、召使のNellyとLottieと数時間を共にする。1918年1月になると、空襲はますます激しくなり、Virginiaたちは、毎晩のように、台所にマットレスを敷いて備えていた。1月31日の空襲は特に長く、Virginiaは午後8時から午前1時15分まで、召使と台所で過ごした。「召使と話すことは、とても退屈だ」“Talking to the servants from 8 to 1.15 (as we did the first time) is so boring.”と、姉Vanessa宛の手紙に書いている。召使と長時間、会話を交わすのは、Virginiaにとって初めての体験だった。しかし、空襲の夜という極限状況下で、共に死の恐怖を体験しているにもかかわらず、召使との間には、コミュニケーションは成立せず、話し合っても、退屈するばかりだった。育った環境も教育も全く異なる両者は、同じ家に住み、共に死の恐怖を体験しても、全くわかりあえないほど、遠い存在

であったのである。

1918年11月11日、ドイツとの休戦が成立して、戦争は終わるが、召使との葛藤は、ますます激しくなっていく。1919年11月28日、Nellyは、またも辞表を提出する。その前の8日間、Virginiaの家では、ディナーパーティーが3回、ティーパーティーが2回開かれ、11才の姪とその乳母が客として滞在し、あまりの忙しさに、コックとしてNellyは耐えられないと思ったのである。Nellyの辞表に対して、VirginiaはNellyを責めるのではなく、「台所に若い二人の女性を閉じ込めて、怠けさせたり、働かせたりしている家庭のシステム“domestic system”に問題があるのではないかと考える。

My opinion never changes that our domestic system is wrong & to go on saying this only breeds irritation. We mean to make the attempt now. No one could be nicer than Nelly... . But the fault is more in the system of keeping two young women chained in a kitchen to laze & work & suck their life from two in the drawing room than in her character or in mine.

(*Virginia's Diary*, 28 Nov. 1919)

Woolfは単に愚痴をこぼすだけでなく、時間をかけて問題の本質を掘り下げ、根本的な解決策を模索しようとする。しかし、1919年の段階では、WoolfはNellyをなだめながら、どうにか辞表を撤回させるより、手段がなかった。Nellyを失ったら、Virginiaは、まともな料理を食べることができなくなるからである。

1924年1月の最初の日記は、召使の問題から始まる。Virginiaは、NellyとLottieを解雇し、電気掃除機と調理家電をつかって、一人の主婦が家事一切を取り仕切る生活を夢見る。それは、21世紀の現代では、当たり前前の生活であるが、当時は、非現実的な夢想であった。

1924年1月9日、Virginiaは、ロンドンのTavistock Square 52番地を10年間借りる契約を結ぶ。52番地は、背の高いテラスハウスで、地下に印刷機を置き、1階と2階は法律事務所に貸し、3、4階を住居にする予定だった。地下の台所はなく、Hogarth Houseに比べるとずっとコンパクトに暮らせる空間だったため、Virginiaは、思い切って召使を一人に減らすことにする。Lottieを解雇し、Nellyは唯一の召使となり、cook-generalとなる。Lottieは、近くのGordon Squareに住むVirginiaの弟Adrianの家に勤めることになり、Nellyと頻繁に会うことはできたが、8年間同じ部屋で寝起きしてきた二人が離れ離れになることは痛手だった。しかも、唯一の召使となったNellyには、料理の他に掃除や皿洗いなどの雑用もこなすことになり、負担は2倍になった。それでもNellyが辞職しなかったのは、Nellyには他に行く場所がなかつ



たからである。いざとなれば、やはり雇い主の方が強かったのである。

1926年4月、またもNellyから辞表が突き付けられ、Virginiaは新しいコックを探し求めて6通の手紙を書くが、召使人不足の折、新しいコックは見つからない。そこにNellyが辞表の撤回を申し出て、Virginiaは安堵する。Nellyは「奥様のことが大好きです」“I am too fond of you ever to be happy with anyone else.”とお世辞を言って、Virginiaを喜ばせる。6月9日の日記には、VirginiaとLeonardが、Nellyのローストチキンとアイスを楽しんで食べたと記され、両者は和解している。

その後も、VirginiaとNellyは喧嘩をしては仲直りを繰り返し、料理のできないVirginiaと帰る家のないNellyは相互に依存しながら折り合いをつけて暮らしていた。二人の関係が最も良好だったのは、1927年秋である。1927年11月20日の日記にVirginiaは、「家庭生活、つまりNellyは黄金のように素晴らしい」“Domestic life, Nelly that is, good as gold.”と記し、11月30日には、Nellyの給料を5ポンド値上げし、これでクリスマスには安心してお客を招待できるだろうとVirginiaは明るい見通しをたてている。

だが、Nellyの問題は賃上げだけでは解決できなかった。1929年4月13日の日記には、再び、問題が表面化し、召使の問題の本質は「システム」であるという、1919年11月の日記で展開した持論を深化させ、次のように語っている。

I am sordidly debating within myself the question of Nelly; the perennial question. It is an absurdity, how much time L. & I have wasted in talking about servants. And it can never be done with because the fault lies in the system. How can an uneducated woman let herself in, alone, into our lives... .

ヴィクトリア朝時代の上流夫人の間では、召使の不満や悪口を言うのが、なかば習慣となっていた。階級制度が堅固な時代であっても、召使も人間であるから、女主人の思い通りに常に従順に働くとは限らなかった。だから、VirginiaがNellyの悪口を言うのは、特に珍しいことではない。しかし、Virginiaの日記に記された“Question of Nelly”が、普通のヴィクトリア朝時代の上流夫人たちの愚痴と決定的に異なるのは、Virginiaは決してNellyの個人的な性格や資質を批判することなく、あくまで、下層階級の教育のない女性に家事労働のすべてを負担させることで成立する、イギリス上流家庭のシステムに問題があることを見抜いている点である。

家庭生活というシステムに対する同様の批判は、長編小説 *The Years* (1937) の中で、登場人

物の一人、Martin が次のように述べている。

It was an abominable system, he thought; family life; Abercorn Terrace. No wonder the house would not let. It had one bathroom, and a basement; and there all those different people had lived, boxed up together; telling lies. (p.195)

(訳)

忌むべきシステムだ、家庭生活というやつは。エバコーン・テラスに借り手が見つからないのは、当然だと、彼は思った。お風呂が一つしかなくて、地下室があって、全く異質な人間が、嘘をつきながら、共に生活しているのだ。

*The Years* は、ヴィクトリア朝時代の 1880 年から、第二次世界大戦が始まる前の 1930 年代まで、移り変わっていく時代を生きた上層中流家庭の人々の物語である。階級も教育も全く異なる召使と主人の間には、対等な人間としてのコミュニケーションは成立しない。召使の Crosby は Martin 坊ちゃんを溺愛しているが、Crosby が愛しているのは、理想化された「坊ちゃん」の幻影である。Martin は Crosby の前では、彼女の理想に合うような「坊ちゃん」を演じなくてはならず、彼女の愛情を重荷に感じている。

ヴィクトリア朝の家父長制度の下では、主人家族の間にも上下関係があり、息子と娘では、受ける教育も子供部屋も異なる。パブリック。スクールから大学へと進学する男の子と、社交界のマナーを習うだけの女の子との間にも、対等な人間としてのコミュニケーションは成立しない。

ヴィクトリア朝の上層中流家庭では、男性は女性を支配し、女性は召使を支配するが、実際の生活では、女性は召使に依存し、男性は女性に依存する。支配しながら依存するという、ねじれた上下関係の矛盾を内包しながら、異質な人々が相互にコミュニケーションのないまま、一つの大きな家で暮らしていたのである。それは、まさに忌むべきシステムであった。*The Years* の中では、時の流れと共に、堅固だと思われていたシステムが、ゆるやかに崩壊していく過程が描かれている。1880 年には、何人もの召使を雇っていた Pargiter 家も、20 世紀に入って、次第に召使のいない生活を始める。1917 年には、召使のいない家庭を訪問した主人公が、「召使がいない方が、ずっと楽でしょう」と言う。ヴィクトリア朝時代なら、召使のいない家は没落した貧困の象徴だったが、1917 年になると、それはむしろ快適な生活ととらえられている。

1929 年 9 月、Virginia と Leonard は、夫婦だけでロドメル別荘、Monk's House にやって

来る。Monk's House には、新型の石油調理器を備え、Virginia は、調理器を使って、シチューやソースを作り、本格的に自分で料理を始める。料理の楽しさに目覚めた Virginia は、子供のように冒険的な料理、実験的な料理をつくることに興奮し、次のように日記に記している。

And so I see myself freer, more independent – & all one's life is a struggle for freedom – able to come down here with a chop in a bag & live on my own. I go over the dishes I shall cook – the rich stews, the sauces. The adventurous strange dishes with dashes of wine in them. Of course Leonard puts a drag on, & I must be very cautious, like a child, not to make too much noise playing. Nelly goes on Friday & so I shall [have] a whole week to experiment in – to become free in. (*Virginia's Diary*, 25 September, 1929)

Virginia は、当時、実験的な作品 *The Waves* を執筆していた。作家として、新しい文学を求めて冒険する Virginia は、実生活においても、料理という冒険に着手した。こうして Virginia の冒険精神が目覚めたのである。この頃から、Virginia の日記には、召使からの解放、独立、自由という言葉が頻繁に見られるようになる。支配者であるはずの Virginia が、自分の召使からの独立をめざすというのは、奇妙であるが、彼女の意識の中では、召使に依存している自分の方が、むしろ支配されていることに気づいたのである。それは不愉快な認識であったが、事実を直視すれば疑いのない事実だった。Mary Wilson は、主従関係において、依存しているのは召使ではなくて、女主人の方であったという認識が、モダニズムの時代における上流階級の人々の不安の根源であったと指摘している。

While Hegel does not directly address domesticity and domestication, the relation between master—or particularly , mistress – and servant could be read as repeating the same dynamic modernist novels, so concerned with the depiction of consciousness in the modern world, repeatedly present the self as fragmented, uncertain, unsure... . In a sense of Hegelian mode, this sense of fragmentation may result from a creeping awareness on the part of the master of this unwanted dependence on the slave, the upper class on the lower – a dependence that looks like, but cannot be, true recognition. (Wilson, p.19)

モダニズム以前の時代、階級制度が堅固だったヴィクトリア朝時代の女主人たちは、自分たちが召使に依存しているなどとは、微塵も考えなかった。しかし、ヴィクトリア朝時代におい

でも、召使を扱うことは女主人にとって困難な仕事だった。ヴィクトリア朝時代に出版されたコンダクトブック、*The Early Victorian Conduct Books of Mrs. Ellis* (1843) の中に、召使の取り扱い方について、指南する章があるが、その章は次のように始まる。

If, as soon as a woman marries, she has the services of domestic assistants at her command, she has also developing upon her the responsibility of their comfort, and their general welfare; and it is a serious thought that she cannot, by any means, escape from this responsibility, whatever may in other respects, be the privileges and indulgences of her situation. (p.299)

従順を美徳として育てられた令嬢も、結婚して女主人となった時、召使に命令し監督する立場に立つ。それは、特権のように見えるかもしれないが、女主人として逃れられない重い責任を併っていた。女主人は、下層階級の若い女中たちに、儉約、勤勉、努力の見本を示し、良き指導者として、良い家庭を構築するようにとコンダクトブックは論じている。しかしながらこの文章の中には、女主人の重い責任について述べているが、女主人が召使に依存しているかもしれないという疑いは、全く見られない。堅固な階級制度を支えていたのは、支配者側の自信であった。ところが、モダニズムの時代になると、支配者側は、労働者を搾取しているのではないかという罪の意識、または主人の方が召使に依存しているのではないかという疑惑に苛まれる。こうして、支配者は自分たちが支配することに自信を失ったことにより、階級制度は内部から崩壊していくのである。

Virginia Woolf の中でも、自分の階級に対する疑いが見られる。彼女の母親は、ヴィクトリア朝時代の家庭の天使として、見事に家庭を切り盛りした女主人だった。母親は、召使を単に召使として扱い、対等な人間とは思っていなかった。その信念が家庭内の主従関係を確固たるものにしていただけだが、娘の Virginia は、召使に対する態度が揺れ動き、召使を混乱させた。Nelly の一番の不満は、“You don’t treat me like a maid.” (*Diary*, 19 March, 1934) だった。つまり、Virginia は母親のように、召使を単なる召使として扱うこともできず、その一方、21世紀の現代人のように、召使を対等な人間として扱うこともできず、中途半端の状況で苦しんでいた。Alison Light は、その状況を、新しい自由と古い期待が交錯する、過去と未来の中間に生まれた “no-man’s land” (主のいない無人地帯、危険領域) と呼んでいる。

“You don’t treat me like a maid,” she apparently complained to Virginia. Virginia wanted to

be 'cordial' and yet she expected Nellie to be 'obedient,' a word which harked back to the old days. New freedoms met old expectations; both parties found themselves in a no-man's land between the past and present. It was an emotional minefield. (p.172)

しかし、召使に依存しているという認識は、不愉快ではあったが、Virginiaに新しい戦いのエネルギーを与えた。つまり、召使からの自由、召使からの解放を求める新しい戦いである。もともと改革者として、ヴィクトリア朝家父長制度に反対し、「家庭の天使」の呪縛からの解放を求めて、実生活においても文学においても新しい自由を模索してきたVirginiaであるから、自由を求める戦いは彼女の最も得意とする領域であった。

こうして、自由に向かって走り出したVirginiaは、もう止まることはなかった。Virginiaは、料理をしながら小説を書き、コックによって邪魔されない静かな生活を楽しむ。それは、「魂の理想的な状態である自由への偉大な前進」“a great advance towards freedom which is the ideal state of the soul” (*Virginia's Diary*, 18 Nov. 1929) であった。21世紀では、仕事をもつ女性は皆、自分の仕事をしながら料理もする。現代では、当たり前の生活の快適さを、Virginiaは発見したのである。

1930年5月、Nellyは肝臓の病を患い、入院して手術を受ける。VirginiaとLeonardは、Nellyが十分な治療を受けられるように取り計らうが、Nellyの不在の間の気安さ、静けさをVirginiaは、すっかり気に入り、退院しても、Nellyに帰ってきてほしくないと思う。“partly the silence is so grateful; & partly the absence of lower classes.” (*Virginia's Diary*, 16 June, 1930)

1930年夏、Virginiaは最も実験的な作品となる *The Waves* を仕上げる。彼女は、自分のポテトをゆでながら、小説を書き、自由と幸福を実感する。

“It is a very happy free, & indeed to me occasionally sublime summer. Yes, I think I have decided against Nelly; but don't let me rub that sore.” (*Virginia's Diary*, 20 August, 1930)

1934年2月、Virginiaは新しい電気ボイラーを購入し、召使がいなくても、自分でお風呂にお湯を入れられるようになり、いよいよNellyを解雇する決心を固める。しかし18年も勤めたNellyを本当に解雇することに、Virginiaは躊躇い、なかなか言い出せない。だが、とうとう1934年3月27日、VirginiaはNellyに解雇を告げる。Nellyは、わっと泣き出すが、Virginiaは“... we had agreed to part on good terms”と言ってNellyをなだめ、25ポンドの小切手と1ポンド札をチップとして渡し、Nellyは初心者向けの料理本を残して、家を出て行く。

Nellyのような料理は作れないが、それでも、Virginiaには、コックから解放された自由な生活の方が貴重だった。

The sense of freedom & calm — no more brooding; no more possessiveness; no more sense of being part of Nelly's world; & her planted there. Even if the cooking is less luxurious, that is all to the good. (*Virginia's Diary*, 11 April, 1934)

Nelly以後、Virginiaは住み込みのコックを雇わず、新しいテクノロジー（電気ボイラーや石油調理器等）を使って、自分でできる家事は自分でこなし、出来ない部分は、通いのメイドを雇って、基本的には夫婦だけで生活した。社会全体を見渡しても、20世紀が進むにつれ、住み込みの召使は時代遅れになり、かわって、フリーランス契約で家事労働を提供する日雇い雑役婦が増加していた。その方が、主人側にとっても、使用人側にとっても、都合がよかったからである。

多くは元使用人で、フリーランス契約で家事労働を提供しており、「日雇い雑役婦」や「荒仕事をする」などと言われていた。彼女たちはおそらく、大きなパーティーがあるときのキッチンの手伝いや、家族の留守中に大規模な春の大掃除がおこなわれるときの補助としてよばれたと思われる。こうした女性たちは、ひとりで生活していたので、指定された時間の範囲だけ、事前に合意した金額で働くという仕事の方式に対応することが可能だった。（『メイドと執事の文化誌』, pp.287～288）

ヴィクトリア朝上層中流家庭に生まれ、複数の住み込みの召使に囲まれ、「家庭の天使」となるために育てられたVirginia Woolfが、コックと戦いながら試行錯誤の末にたどりついた生活様式は、21世紀の現代、多くの仕事を持つ女性たちが実践している生活に驚くほど似ている。つまり、現代では、高等教育を受け、専門職に就いた女性は、夫から経済的に自立し、料理その他の家事は、家電製品を使って自分でこなし、住み込みの召使に依存しない。しかしながら、仕事との両立のため、自分でできない家事労働もあるので、そのような場合は、フリーランス契約の家事労働者に掃除を委託したり、宅配弁当を利用したり、子育ては保育園を利用する。男性もまた、家庭の中で女性に依存しない。現代の夫は、料理や家事をこなし、育児にも参加することが求められる。

階級社会は、支配する階級と被支配階級とが、互いに依存しあって成立していたが、階級の

ない社会では、健康な成人は誰にも依存することなく自立し、相互にコミュニケーションが成立する、風通しの良い社会をめざす。現実には、その理想が完全に実現しているとは言えないが、少なくとも、今の私たちがめざしている社会は、100年前に Virginia Woolf が、息苦しいヴィクトリア朝階級社会から逃れて、自由を求めて戦い始めた時からスタートしていると言えるだろう。

### Works by Virginia Woolf

- A Change of Perspective: Collected Letters III, 1923–28*, ed. Nigel Nicolson, 1977.  
*The Captain's Death Bed and Other Essays*, ed. Leonard Woolf, Hogarth Press, 1981.  
*The Diary of Virginia Woolf*, vol.I: 1915-19, ed. Anne Olivier Bell, Penguin, 1977.  
*The Diary of Virginia Woolf*, vol.II: 1920-24, ed. Anne Olivier Bell, Penguin, 1978.  
*The Diary of Virginia Woolf*, vol.III: 1925-30, ed. Anne Olivier Bell, Penguin, 1980.  
*The Diary of Virginia Woolf*, vol.IV: 1931-35, ed. Anne Olivier Bell, Penguin, 1982.  
*Moments of Being: Unpublished Autobiographical Writings*, ed. Jeanne Schulkind, Triad Grafton, 1978.  
*The Waves*, 1930, rpt. Hogarth Press, 1990.  
*The Years*, 1937, rpt. Hogarth Press, 1990.

### Other Works Cited

- Mrs.Ellis. *The Early Victorian Conduct Books of Mrs.Ellis*, 1843, rpt. Athena Press, 2011.  
Lee, Hermioe. *Virginia Woolf*, Alfred A. Knopf, 1997.  
Light, Alison. *Mrs.Woolf & the Servants: the Hidden Heart of Domestic Service*, Fig Tree, 2007.  
Wilson, Mary. *The Labors of Modernism: Domesticity, Servants, and Authorship in Modernist Fiction*, Ashgate, 2013.  
エヴァンス, シヤーン. 村上リコ訳, 『メイドと執事の文化誌—英国家事使用人たちの日常』, 原書房, 2012.  
ホーン, パメラ. 子安雅子訳, 『ヴィクトリアン・サーヴァント—階下の世界—』, 英宝社, 2005.